

## 論文要旨

外傷患者の生存率の増加の結果、生命の危機を脱しても、身体的障害が残る場合や、その外傷によるボディイメージの変化や身体的障害そのもののために、これまでの社会的立場や役割の変更を余儀なくされる場合がある。その過程における精神的側面に対するケアが必要とされているものの、日本における外傷による ASD 患者あるいは、外傷直後の患者に対する看護ケアについては、教科書や雑誌などの記載はあるものの、研究結果からのエビデンスは記述されておらず、経験知より記述されているものがほとんどであった。

身体的外傷患者に対する ASD への介入の効果を明らかにした海外の先行研究から、効果的なアセスメントや介入方法について統合し、看護に求められる精神的ケアに関する示唆を得ることである。また、今後日本においてどのような研究がなされるべきか示唆を得ることを目的として、文献レビューを行った。

PubMed を用い、全年検索を行った結果、選択基準を満たし最終的に取り上げた文献は 8 論文であった。海外の先行研究でも ASD に特化した研究は限られており、PTSD の予防的介入を目的に ASD の時期から介入している研究や、ASD から PTSD への移行を調査した研究がほとんどであり、外傷患者の ASD に特化した介入研究が蓄積されている段階であり、外傷の種類によるアセスメントやケアの特殊性については、今後検討していく必要があると考えられた。

また、様々な面接や尺度をアセスメントツールとして用いていたが、ASD と PTSD の症状のみでなく、抑うつと不安を測定する尺度を組み合わせ、さらに自己効力感などの心理社会的力量も含めてアセスメントしていた。今回対象とした研究では、ASD となる危険因子や、ASD から PTSD への移行に関する予測因子については一致した結果は得られなかったが、単なる事故の種類や外傷の程度に限らず、個人のストレス対処機能や家族関係などの社会的背景をも考慮して、アセスメントすることが有効であることが示された。

介入方法については、単に ASD や PTSD の症状や対処方法について情報提供を行うだけでは効果が得られず、認知行動的アプローチを用いた手法が有効であることが示された。患者自身が外傷の体験についてどのように認知しているかを自覚することができ、かつ認知面に働きかけ、個別性を考慮したアプローチが、有効な介入方法であると考えられる。

外傷の程度によって必ずしも ASD や抑うつなどの精神症状が生じるわけではなく、どの患者も精神的な側面で問題が生じうる体験をした直後であるため、初期に関わる救急医療

のスタッフが、外傷の特殊性や精神的側面のアセスメントの必要性を認識することが重要である。しかし、身体的治療が優先される救急医療や急性期治療の領域において、精神的側面まで全てケアすることは難しく、精神医学の専門家である精神科医、心理士、リエゾン精神専門看護師などのトレーニングを受けた職種がアセスメントおよび介入できるシステムの構築が必要と考えられる。今後、事例研究や患者の主観的な体験を基にした質的な研究などを蓄積し、急性期の状況にある患者の理解を進め、さらに有効な精神的ケアについて検討していく必要がある。